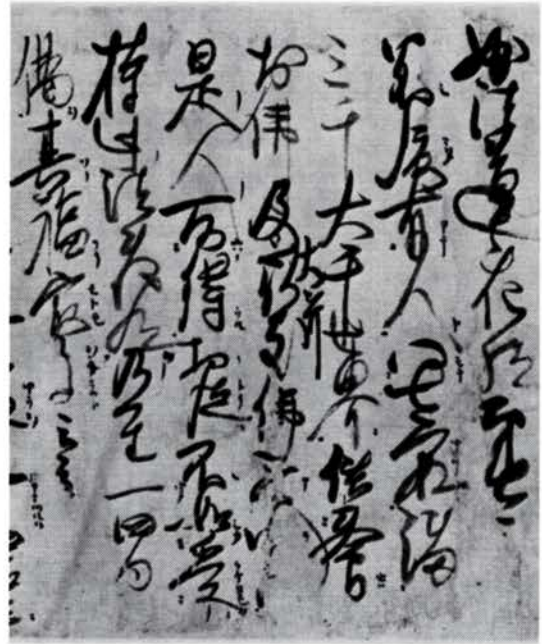




今月の御聖訓



(妙法蓮華經第七に云く)

妙法蓮華經第七ニ云ク、

(「若し復人有りて、七宝を以て、

若シ復有レテ人、以ニテ七宝満ニテテ

(三千大千世界に満てて、)

三千大千世界一、供ニ養

(仏及び大菩薩・辟支仏・阿羅漢を供養せん。)

於仏及び大菩薩・辟支仏・阿羅漢一。

(是の人の得る所の功德、)

是人ノ所レ得ル功德、不レ如下カジ受ニ

(此の法華經の、乃至一四句偈を受持する)

持スル此ノ法華經ノ乃至一四句

(その福の最も多きには如かじ)云云。

偈一、其ノ福ノ最モ多キニハ云云

【宝輕法重事 全集一四七四頁】

目 次

《第51回法華講總會特集》

今月の御聖訓

住職指導.....菅野憲道 2

講頭挨拶.....森 秀之 5

祝辞.....大橋一法 7

講演「是日尼御書を拝して」.....妙行院 渡辺道也 9

カメラ・アイ〈法華講總會〉.....10

.....20

六月の行事 水無月詠草 恵日俳壇



「継続は力なり」をテーマに

第五十一回源立寺法華講総会を開催

五月八日に、新型コロナウイルスの分類が五類移行され、マスクの着用も自由となったことから、初めてとなった第五十一回法華講総会が、五月十四日（日）午後一時から、本堂において開催されました。

当日は、時々雨がぱらつくはつきりしないお天気でしたが、定刻午後一時より、菅野ご住職の導師により、読経・唱題が奉修され、その後、場内の準備を整えて総会へと移ると、まず開会に先立って司会・進行の仲村吉子さん・井元恵子さんから、新入講者の紹介がされた後、仲村吉子さんの開会の辞より総会は始まりました。次いで「諸法実相抄」のご聖訓を奉唱し、続いて西良子副講頭の会計報告、松井照雄顧問の監査報告、寺川春美副講頭の活動報告があり、次いで六月から源立寺に在勤される大橋一法師よりお祝辞をいただきました。

その後、北摂地区の橋本良介さんと、中川美奈子さんが登壇され、所感を発表されました。そして、小憩に入る前恒例の、松井顧問が立たれての体をほぐす体操があり、一旦小憩となりました。

小憩の後、秋田県美郷町よりお越しいただいた妙行院・渡辺道也師より、「『是日尼御書を拜して』本因の修行とお給仕について」（九頁）と題してご講演をいただきました。

その後、菅野ご住職の住職指導、さらに虫邊慶次さんの閉会の辞をもつて、法華講総会は終了し、引き続き、第十一回の新菩提寺建立護持会へと移り、経過並びに会計報告、指導教師の挨拶の後、全員でお題目を三唱して、法華講総会・新菩提寺建立護持会とも滞りなく終了しました。

【法華講総会 住職指導】

清浄の信を持つとう

住職 菅野 憲 道



菅野ご住職

第五十一回総会、大変おめでとうございます。

昨年の記念総会を大きな節目として、この総会がまた新たな年輪を刻むことができ、大変うれしく思う次第です。

今年は、「継続は力なり」というスロガンで開催しましたが、言うまでもなくこれは世間のことわざです。しかしてこれを仏法に翻訳しますと、「受持即観心」ということに通ずるものと思います。

法華経の修行は如説修行といって、受持・読誦・解説・書写という五種法師に尽きるのですが、その五種の修行も、突き詰めていえば受持の一行に集約されるのです。受持とはどういうことかというところ、一心、一念にお題目を、仏法を持つていくことだと教えられています。

それでは、その一念に持つていくということとは、どういうことかというところ、これは御書の中に、

「命已に一念に過ぎざれば」(「持妙法華問答抄」全集四六六

(頁)

という御教示があります。

命というのは、いわゆる生命科学的な生命観ばかりではないのです。むしろ人生は、日常の一瞬々々の内面的な心の働き、感情の起伏、意識の変化等の全体をも含めて「命」というのです。もちろん心の状態は、その時々々の身体の影響も受けまします。また環境の変化の作用もあります。しかし、それら心身や環境も含めて、ただ今の「命」「一念」と捉えます。よく世法でも、あの人は命が汚いとか、あるいは地獄の命だというような表現をします。この刹那々々の命の状態は、過去世からのさまざまな業因によってもたらされ、「煩惱」が際限なく湧き起こって道に迷い、易きに流され、我執に汚染されてしまうのが我われの一念なのです。その刹那々々、常に一念に南無妙法蓮華經の御本尊を信受し渴仰していくことに、如説修行の要諦があるのです。

したがって先ほど森講頭から「継続は力なり」のテーマについて紹介がありましたように、

「受くるはややく持つはかたし。さる間成仏は持つにあり。」(全集一—三六頁)

という事がいえるのです。ただその「持つ」ことが困難で、

「此の経を持たん人は難に値ふべしと心得て持つなり」と仰せられているのです。また難に値うということは、内からも外からもいろいろな迷いや障礙が競い起こり、信心を持続す

ることに種々の困難なことが生じてくるのです。

多くの人は、自分が正しく生きよう、あるいは嘘偽りなく真実に生きよう、あるいは汚い邪な心を起こさず、できるだけ清浄な心でと思うのですが、時に迷いや疑念が生じて、我見を押し通したり、自己中心的な損得勘定になったり、あるいは自分の力を過信して信心など必要ないと慢心したり、あいつには負けたくないとか、あるいは何で正しい者が難に遭うんだろうとか、愚にもつかない迷いが生じてきて、仏法を持っていくということが困難になってくるのです。それを、

「難に値ふべしと心得て持つなり。」

と仰せられているのだと思うのです。

ですから、この信心を持つということとはなかなか難しいのであって、正しい教えと解って入信しても、信心を続けることができず、休眠状態か、退転の落とし穴に堕ちてしまうのだと思うのです。

その意味で、我われが法華經のご本尊を一念に持ち、お題目を一心に唱えることは、御書の中に十四誹謗とか、あるいは十悪・五逆ということが説かれているように、一念心中に悪心を起こさない、あるいは怨嫉しない、あるいはまた懈怠や慢心しないためでもあるのです。妙法蓮華經の受持は「防非止悪」といって悪心を起こさないことと一体です。

また住まいや衣服は時がたつと汚れて掃除洗濯しますが、命も悪心・謗法に触れて穢れ、邪よこしまになつていく。これを、妙法

蓮華經の力をもって浄化して行くのです。それを、一心清浄と
 いて、ただいまの命をお題目によって清らかにし、浄仏国土
 化していくことが、信心の基本なのです。

宿縁深くしてこの仏法に巡り会いながら、ご本尊の功德を知らず、己のいのちが病んでいることにも気づかないでは情けないことです。お題目を唱えながら悪しき心を増長させ、利他の心もなく我欲の祈りばかりでは煩惱の火に油を注ぐばかりです。

自分自身の命を磨いて健康に、また正しく、また清らかに、また強く持つていく方法を教えられているのだと思うのです。

今、世の中は非常に低迷しています。ちょうど日本人がこの失われた三十年という期間に、だんだん衰退していくような兆候が見えているのですが、このことも考えて見れば、すでに数十年前から、日本人は物を作るのは得意であり、ハードの面では優れた実績を残してきたのですが、ソフト、いわゆるそれを実際に何に使うのかとか、あるいはどういう情報を重視するのかという、ソフトの面では非常に後れをとって、そのことが気がついたら日本が遅れる大きな要因になったといわれております。

心をソフトに例えれば、ハードは我われの身体の健康であったり、あるいは社会制度などに喩えれば、ソフトにあたる精神面において、日本人は非常に立ち後れてしまったのではないかと思います。無気力、無関心、無責任が蔓延し、伝統的宗教は形骸化し、新興宗教は営利企業化し、多くの国民は宗教心を失

って利那的快樂に流される。モノで栄えて心で滅びる事態が差し迫ってきているように思えます。

幸いにして、我われはこの法華經の信心を持って、「心こそ大切なれ」との教えをいただき、「命已に一念にすぎざれば」という一念を妙法受持によって磨くことを学んできました。

自行化他の実践により仏道を行じていくことによって、本当の智慧も生まれてくるし、また悔いのない人生を過ごすことができるのだと思うのです。

今総会の「継続は力なり」というテーマは、正信覚醒運動を継続するという意味もありますが、それ以上に、わが一念に清浄の信を持つこと、白蓮華のごとく、世間に行じて、しかもいかなる世間の汚泥にも染まらず、この正信の道とともに歩んでいこうというメッセージが込められているのです。

どうか、この第五十一回を、第一回の総会という新たな心で出発し、日々に信心を深め、月々に修行を重ねて、共に信心を確立して、悔いのない人生を送れるよう、精進していきましょう。

本日は、大変おめでとうございます。



【 講演挨拶 】

継続は力なり

講演 森 秀之



森 秀之講演

と思います。

さて、本日の総会のテーマとして、「継続は力なり」を掲げました

この「継続は力なり」ということには、見方によって二つの意味があるように思います。

一つは「継続することはやがて力となる」という、何でもものごとをやり続けると、やがて自身の身となり

肉となつて、果報として力になるという意味であり、もう一つは、何事も続けて実践していくこと自体が力である、ということであろうかと思ひます。

大聖人様は、古来より「此経難事抄」といわれる四条金吾殿へのお手紙において、

「法華経の文に『難信難解』と説き給ふは是れなり。此の経をききうくる人は多し。まことに聞き受くる如くに大難来たれども『憶持不忘』の人は希なるなり。受くるはやすく持つはかたし。さる間成仏は持つにあり。此の経を持つたん人は難に値ふべしと心得て持つなり。」(全集一―三六頁)

と仰せです。

「受くるはやすし」とは、私たちの人生において四苦八苦を受けるといふことは、いかなる人でも免れ得ないので、そのことを、客観的に自分の頭で理解することは簡単ではありませんが、心に信じて思い留めること、常に念頭において忘れない人は殆どいないということをお仰せなのです。

「持つ」とは、南無妙法蓮華経を我が生命として、主体的に日々精進する姿勢、常に自分の信仰を見失わないという意味と、それと同時に南無妙法蓮華経の信仰

本日は、第五十一回源立寺法華講總會を法華講員の皆様のご参集のもと、無事盛大に開催することができ、誠にありがたいことと、共々にお慶び申し上げます

は困難であること、その覚悟を承知して南無妙法蓮華経を信ずることが、持つという意味にならうかと思えます。

信ずるにもいろいろな意味があります。その中でも常に心にとどめて、強く願って思い続ける、南無妙法蓮華経の教えを忘れず、お題目を唱える朝夕の実践ということでしようが、信ずるには耐え忍ぶ、じつとこらえる、我慢するという意味もあり、私たちの信心修行は、南無妙法蓮華経の信仰を持つことにもなう困難にも向き合う心構え、覚悟が大切であると思えます。

その日々の精進の継続が力であり、何事にも不動心で崩れることのない、成仏という最高の人格が形成されていくのだと確信していったならば、ますます信心修行に励んでいけるのだと思えます。

私たちを取り巻く社会環境は、今後 AI（人工知能）の発展により、ロボットの指令によって人々が支配されていきそうな時代状況でもあり、また、今だけ、お金だけ、自分だけという利根的な人々

が蔓延している状況でもあると感じています。しかし、そのような困難な時代であればこそ、生涯現役での信心修行と化他行という、正しい南無妙法蓮華経の信仰を、後生に伝えていく使命もあります。大聖人様は、「此経難持」と心得て信心修行をなさいと、四条金吾殿に申されていきますが、そのことはまた、私たちは継続する一念、思いが、やがて力になるとはどういうことか、その強い思いを継続すること自体が力であるとはどういうことかということ、改めて一人一人が自らに問い質して、日々の信心修行に、共々に励む契機としていかなければならないということではないかと思えます。

どうか、大聖人様への強い信心を持つて、今後ますます手続の師・菅野ご住職と共に、信心修行に励むこととお誓いし、もって總會のご挨拶とさせていただきます。

最後に、御書の一説を拝読させていただきます。

「法華経の法門をきくにつけて、なを

なを信心を上げむをまことの道心者とは申すなり。天台云く「從藍而青」云云。此の釈の心はあいは葉のときよりも、なをそむればいよいよあをし。法華経はあいのごとし。修行のふかきはいよいよあをきがごとし。」（上野殿後家尼御返事」全集一五〇五頁）
本日はまことにおめでとうございまして。



【祝辞】

私たちの振る舞いが法灯相続に

大橋 一 法



大橋一法師

第五十一回目の法華講総会開催、誠におめでとうございます。私は、六月から源立寺に在勤し、ご奉公させていただくことになりました、大橋一法と申します。どうぞよろしくお願いい

たします。

ご住職に、総会で祝辞を言ってもらいたい、源立寺に在勤することを報告して欲しいと言われ、どういうお話をさせていたどうか色々考えました。

実は、今年度「総会」と名の付くものに参加するのは五回目になります。前の四回は、視覚障害者の方々と縁ができて、その方々の総会でした。

障害者が住みやすくなるように、権利が守られるように、福祉施策が充実するように、運動している人たちです。でも、若い人がいませんでした。なかなか若い人は活動に参加してこないそうです。年配の方々の活動によって福祉も少しずつ充実し、恩恵を受けているにも関わらず、若い人は活動には関心がないようです。みなさん悩んでおられました。

法華講も、若い人に頑張ってもらいたいと思うのですが、なかなか若い人が参加してくれないのが現実ではないでしょうか。どうしたら若い人たちに信仰を受け継いでもらえるか、なかなか難しい問題です。若くて元気なうちは信仰に興味を持たない、という世相も仕方ないことかもしれません。しかし、そうとばかり言って放っておくわけにはいきません。

ではどうすればいいのでしょうか。俗に、「子供は親の言うようにはしないけれど、しているようにする」

と言われます。しかし、真似して欲しくないところを真似て、真似して欲しいところを真似てくれないという現実もあるようです。

親であったり、法華講の役員さんもある意味そういう立場だと思いますが、国を治める人、人の上に立つ者の心構えとして、論語に、

「民は之に由らしむべし、之を知らしむべからず」という言葉があります。

これは一般に、「人民を従わせることはできるが、なぜ従わなければならないのか、その理由をわからせるのは難しい」と解釈されています。従う理由など説明せず、従わせればいいのだということです。どうも、私は納得できませんでした。

ある時、実はそうではないという解釈を目にしました。

この言葉は、「知らせずに従わせる」という意味などではなく、

「理由など説明せずとも、人が従うような人物になるために努力することが大切で、理解させるために努力することが重要なのではない」という解釈でした。

私は、なるほどと思いました。上に立つ者として努力すべきことは、説明に力を尽くすことや無理やりにも従わせるなどということではなくて、人が信頼してついてきてくれるような人物になることだということです。

当宗では、「常随給仕」が強調されます。「常随給仕」は、

給仕をさせるというものではなく、給仕する側が自主的にするものはずです。だからこそ、常随給仕によって信仰が受け継いでいけるのだと思います。

私たちは、手継ぎの住職に近づき、ご住職の信仰の姿から学ぶのだ、ということですが。住職の言葉だけなら、説明だけなら、「寺報」などでいくだけでも目にすることができます。でも、それだけではダメなのだということでしょう。

大聖人は、「振る舞いが大切である」と、いたるところで仰せです。住職の振る舞いから学び、また、私たちの振る舞いで、回りの人に信仰について、影響を与え学んでもらえるように、努力していかねければならないのだと思います。そうすれば、必ず法統相続も叶うのではないのでしょうか。

私も、そういう気持ちで六月から修行させていただくつもりですので、どうぞよろしく願います。

本日は、法華講総会誠におめでとうございます。



法華講総会講演 (要旨)

是日尼御書を拝して

—本因の修行とお給仕について—

妙行院 渡 辺 道 也

皆さまこんにちは。第五十一回源立寺法華講総会がかくも盛大に開催されました事、誠におめでとうございます。

私は、ご紹介に与りました秋田県美郷町の妙行院にてご奉公させて頂いております渡辺道也と申します。

本日の総会にあたり、ご住職より講演のお話があり、内心私のような者ではとためらいましたが、昨年よりご住職の資料整理のお手伝いをさせて頂いている事もあり、何かとお気遣い頂き、大変お世話になっておりますので、その御恩返しが少しでも出来ればと、浅学非才の我が身を省みず、仏恩報謝のため、お引き受け致した次第でございます。

本日の私の法話は、ご住職の日々のご指導や『恵日』等において、既にご承知の内容かと存じますが、再確認の為に、どうか楽な姿勢にて、レジメをご覧頂きながら、ご聴聞下さいませ。様お願い致します。

《妙行院の開所について》

さて本日は冒頭に拝読致しました『是日尼御書』を通して「本因の教えとお給仕について」少々申し上げたいと存じますが、源立寺様でも新菩提寺建立の準備、計画をなされているようなので、初めに妙行院の開所について少々お話をさせて頂きます。

と言いましても都会と田舎、規模も何もかも桁が違い過ぎて、参考の「さ」の字にもなりません。東北にはそんなお寺があるのか、という程度でお聞き願いたいと思います。

私が法性寺へ赴任した年は、阪神大震災が起きました平成七年の五月であります。それより十一年後の平成十七年十一月、石田ご住職がご逝去され、此れまでの正信会の慣例に随い、法性寺を宗門へと明け渡し、と同時に横手の地から正信の灯を絶やさぬようにと、雪の降り積もる年末の十二月二十二日、市内の民家を借りて「横手布教所」を開所致しました。

法性寺は敷地が六〇〇坪、本堂は六十畳、屋根は瓦葺き、東

51回

去華講總會



挨拶：時野心住師



講演挨拶 森 秀之講演



祝辞 大橋一法師



《カメラ・アイ》 第51回

源立寺法華講会



ご講演:妙行院 渡辺道也師



所感発表 中川美奈子さん



所感発表 橋本良介さん



(9頁下段よりつづく)

北の正信会の中では一番大きなお寺でありました。しかし横手布教所は、建坪二十二坪、本堂はわずか十二畳と本当に狭い所からの出発でありました。

正直な所私自身、どこかに恥じらいの心がありましたし、本当にここでよいのかという忸怩たる思いもありました。

何よりも講師さん達が、世間体を気にされ、大きいお寺から一般住宅の布教所の信心に、皆さんが着いて来てくれるのかという不安や心配で一杯でありました。しかし、その不安や心配は無用でした。

布教所を開所して間もなくして、ある講師さんの法事があり、信心をしていない親戚の方もお参りされていましたが、その講師さんが親戚に対し、「ここが私たちのこれからの新しいお寺です。」と布教所を紹介していた姿を見聞きした時に、ご信者さんは「本当に有難いなあ」と思う反面、私自身僧侶として恥ずかしく、反省させられた事を今でも時折思い出しております。

大聖人様は『御義口伝』の中で、

「今日蓮等の類、南無妙法蓮華経と唱へ奉る者の住所は山谷せんごく曠野こうや皆寂光土なり。此れを道場と云ふなり。」(全集七八一頁)



妙行院の開所式 (平成19年9月)

と仰せであります。どこであろうが、小さかろうが、御本尊まします所が道場であると、講師さんを通して恥ずかしながら自省した次第であります。

私が法性寺に赴任してから間もなく、何時訪れるか分からない寺院明け渡しの準備として「寺院建立準備委員会」を発足しておりました。

そして横手布教所を開所してからは、一日でも早く自前の道場を取得したいとの思いから、「寺院建立委員会」へと名称を変更し、僧俗が一丸となり確固たる信念をもって精進した結果、法性寺明け渡しより一年四ヶ月後の平成十九年三月に現在の妙行院の物件を取得することが出来ました。

敷地一八〇坪、建坪四〇坪、本堂は十六畳です。私たち妙行院の場合は、中古の物件でありましたので、ご宝前の改築工事、仏具購入、木の伐採と駐車場整備、トイレ増設、倉庫建築等々、整備事業が必要となり、講師各位には改めて浄財勸募をお願いし、半年後の同年九月、晴れて「妙行院入仏開所式」を執り行うことができたのであります。

現妙行院を取得する前には、何件かの物件を見て廻りましたが、やはり一般住宅ですので、既存の間取りを寺院として活用できるか等、適さない物もありました。中には間取りと言い、

部屋数といい、資金面で少し頑張れば申し分のない物もありましたが、立地的に断念した物件もありました。

『継命』を見ておりますと、全国の正信会寺院のあちこちで寺院建立・落慶法要が執り行われております。どこのお寺でも、そのお寺にあった準備をし、年月をかけ、物事を成就しているようであります。

当然の事ですが、新しいお寺の場所が決まれば、近くなる人と、遠くなる人が必ず出てきます。たとえお寺が隣りにあったとしても、志がなければお寺へはお参りは出来ないとよく云われます。

因みに妙行院の場合は横手市から美郷町への移転となりましたので、多くのご家庭が遠くなってしまいました。

大聖人様は『乙御前母御書』に、

「道のとをきに心ざしのあらわるるにや」(全集一二三三頁)

と仰せであり、また日寛上人も寺院参詣について足の裏に着いた砂の数だけ功德があるとお話もあります。

仮に近くなつたからといってわざわざ遠回りする必要はありませんが、その分早くお寺に参詣し、お掃除をさせて頂いたり、お題目を唱える事が出来れば、その分功德を積む事になります。どうか皆さま方には、『異体同心事』の、

「異体同心なれば万事を成じ、
同体異心なれば諸事叶ふ事なし」(全集一四六三頁)

との御金言を旨に、源立寺ご住職とよくご相談され、源立寺様にあつた、信心為本の菩提寺建立の大願成就に向け、ご精進の程を心よりご祈念申し上げる次第であります。

《正信を貫く信心の大切さ》

正信会の現状からいたしますと、ご住職が亡くなれば法性寺同様に、いずれは源立寺を宗門へ明け渡さなければならぬ現実があります。

今後、宗門がこの源立寺を管理したとしても、仏様はあくまでも皆様方の正信の志をお受けなされるのでありますから、これまで皆さま方が源立寺のご本尊様になされてきた御供養を含め、その志や功德までも、宗門が管理、奪い取ることは絶対に出来ないであります。

何よりも御本尊様は、必ずや何時までも皆さま方の正信の行動を、見守って頂いている事を確信し、ご精進頂きたいと思ひます。かの二宮尊徳はつぎのような歌を歌っております。

「この秋は 雨か嵐か知らねども

今日の務めに 田草とるなり」

この歌は、田植えも終わり、今は天候が良くても、収穫の秋になれば台風や嵐など自然災害によつて、せっかく実つた作物が収穫できないかも知れないが、秋にどうなるうとも、今は秋の実りを祈つて、今なすべき田んぼの草取りにただひたすら専念している、という歌であります。

将来の不安ばかり抱いていてもどうしようもない、何にもならないと、今の今を大事に生きようとした歌であります。

また、この後お話しします本因の教えについて、非常に理解しやすい、本因に通ずる歌であると思ひます。

私たちに置き換えても、今の今を真心を込めて、それぞれの分

に応じてご本尊様にお仕えし、ご奉公申し上げることが皆さま方の勤めであり、信心であると思えます。

《日興上人の「いづくにても」とのご決意を胸に》

そして私たちが絶対に忘れてはならないことは、第二祖日興上人の、

「身延沢を罷り出で候事の面目なさ、本意なさは申し尽くし難く候へども、打ち還して案じ候へば、いづくにても聖人の御義を相継ぎ進らせて、世に立て候はん事こそ詮にて候へ。」（『原殿御返事』日興上人全集三五六頁）
とのお言葉であります。

私たちは、往々にして何かを決意したとしても、思うようにならない時には、きつとあのせいだ、このせいだと、自分に力がないことを棚に上げ、挙げ句の果てには他人のせいにし、何かと言い訳をしてしまいがちであります。

しかし、日興上人の「いづくにても」

とのご決意は、そういった言い訳を断ち切った、損得を考えない、「聖人の御義を相継ぎ進らせて、世に立て候はん事」の為には、何なる条件をも付けずに、どこまでもどこにおいても、謗法厳誡・正法護持を貫いていく、とのご決意のお言葉であると私は拝しております。



講演される渡辺道也師

皆様方の多くは学会や宗門の間違いに気づかれ、源立寺様に所属され現在に至っているとあります。

皆様方が正信の信心を貫き通されて来たこれまで、そしてこれからも、その時々において御本尊様ならびにご住職をお守り

され、共に正信覚醒運動の信心修行に励んでいる、そのお一人お一人の志を、必ずや御本尊様はご照覧遊ばされ、常にお褒め頂いていることと確信いたします。

また皆さま方は、その冥の照覧を信じているからこそ、またそれを恐れるが所以に、誇りをもって正信を貫いているのではないかと思います。

ですから、これまでせっかく積み上げてきた正信の功德善根を、一時の損得や悪知識、また悪縁などによって自らの浅はかな考えから断ち切ってしまうような、どこまでも正信のご信心を貫いてこそ、成仏があることを今一度再確認していただきたい思います。

いま置かれているそれぞれの立場において、今できることを、させていただける事の有り難みに感謝しながら、志の念をもつてご精進いただきたいとお願い申し上げます。

《国府入道ご夫妻の信心》

さて前段が長くなりましたが、それでは、本題に入りたいと思います。冒頭に拝読致しました御書は、建治三年（一二七七）、大聖人様御歳五十六才の時、佐渡の是日尼に与えられた『是日尼御書』（前欠・真蹟全文）であります。

この是日尼は、別の御書では、こうの尼と呼ばれ、国府入道殿の奥様であります。佐渡の地においては、阿仏房ご夫妻と同時期に、大聖人様のご信者になった方でもあります。

また国府ご夫妻は、阿仏房ご夫妻と共に、流罪の身で不自由なご生活を強いられていた大聖人様を、夜には人目を忍んで食事をお届けするなど、献身的に外護の供養をされた方でもあります。拝読の御書から、「また今年きて菜つみ水くみ……」とありますから、前年の建治二年に続き、国府入道殿は是日尼に留守を頼み、日本海の荒波を渡り、険しい山々を越えて、さまざまな困難を物とせせず、遠路はるばる身延山中の大聖人様をお訪ねされたのであります。

今でこそ、新幹線や高速フェリーがあり、大阪からでも一日で行くことが可能ですが、大聖人様ご自身も鎌倉から佐渡へのその道のりの厳しさを『寺泊御書』に、

「今月へ十月なり」十日相州愛京郡依智の郷を起ちて、武蔵の国久目河の宿に付き、十二日を経て、越後の国寺泊の津に付きぬ。（中略）道の間の事、心も及ぶこと莫く、又筆にも及ばず」（全集九五―一頁）

と、道中のことは、想像もつかないし、また筆で書きつくすこともできない、と仰せの通り、まさに現代の私たちには、とてもとても想像がきかない程、非常に厳しく険しい道のであった

のであります。

しかも片道二十日前後の行程であり、ましてや一度旅に出れば、今生のお別れとの覚悟も必要であったものと思われま

す。この前年の建治二年、大聖人様の元を訪れた時の様子が、『国府入道殿御返事』の冒頭に、

「あまのり（海紫菜）のかみぶくろ（紙袋）二、わかめ（裙帯菜）十でう（帖）、こも（小藻）のかみぶくろ一、たこ（靈芝）ひとかしら（二頭）」（全集一三二―三頁）

とあります。

沢山の御供養の品々を携えて身延に行かれたことが伺えます。拝読の『是日尼御書』は、前半部分が欠落していますので、不明ですが、当然、前回同様、いろいろな御供養の品々に加え、留守をしている佐渡の檀越からの御供養の品々をも携え、また佐渡の代表者として大聖人様にお目にかかったものと思えます。

《身延を目指すも、途中で引き返す》

ここに一つのエピソードがあります。国府入道殿は、この翌年の弘安元年（一二七八）七月にも、阿仏房と一緒に大聖人様の元を訪れようとしたが、『千日尼御前御返事』の中に、

「こう入道殿は同道にて候つるが、わせ（早稲）はずでにちかづきぬ、こ（子）わなし、いかんがせんとて、かへられ候ひつると、かたり候ひし時こそ」（全集一三〇―九頁）

とあります。

すなわち阿仏房ご夫妻には、藤九郎というご子息がおりましたが、国府入道殿ご夫妻は子供を授からなかったようで、早生

の稲刈りが天候によって早まってしまい、阿仏房と共に準備を整え、身延を目指して出発されましたが、国府入道殿だけは途中で佐渡へ引き返えしたと書かれてあります。

国府入道殿も出発前には、どうしようかときつと迷われたに

違いないと思います。しかし、どうしても早く大聖人様にお会いしたいというお気持ちから、半ば強引に出発されたのかも知れません。ただし結果的には、引き返す事を余儀なくされましたが、それほどまでに大聖人様を渴仰恋慕されていた事の表れではないかと思えます。

《本因本果の立て分け、

釈尊仏教と宗祖の本因仏法の違い》

このエピソードから、私たちが受け止めなければならぬ大切なことは、大聖人様の教えは、本因妙の仏法であるという点であります。

朝晩の勤行の観念文の時に、大聖人様の事を本因妙の教主とご観念文致します。それに対しお釈迦様、釈尊は本果妙の教主といひます。

本因とは本果に対する言葉で、因行果徳と言いますが、基本的には、本因とは私たちの修行をさし、本果とはその修行によって得られる果報、即ち成仏を意味するのであります。しかしこれは一般的な本因本果の立て分けでありまして、



講演を熱心に聴聞する参加者

大聖人様は、『御講聞書』に、

「此の経を持ち奉る時を本因とす。其の本因の俛成仏なりと云ふを本果と云ふなり。日蓮が弟子檀那の肝要は本果より本因を宗とするなり。」(全集八〇八頁)

と仰せられております。

また『南部六郎三郎殿御返事』には、「法華経の心は、当位即妙・不改本位と申して、罪業を捨てずして仏道を成ずるなり。」(全集一三七三頁)

と仰せであります。

ここで釈尊の本果の仏教と、大聖人様の本因の仏法との違い、また本因の成仏とはどのような事かと言いますと、マラソンに譬えることができます。

釈尊の仏教では、四十二・一九五キロのフルマラソンを完走できた人しか成仏が許されず、譬えばスタート直後に倒れたり、仮に四十二・一九四キロのゴール直前で倒れてしまえば、それまでの努力は報われず、完璧にゴール出来た、いわゆるスーパーアスリートしか成仏が許されないので、本果妙の釈尊仏教の厳しい成仏観であります。

一方大聖人様の本因妙の教えとは、たとえゴールができなくとも、僅か一步・二歩で倒れたとしても、自分のもてる力を十分に発揮し、一生懸命にゴールを目指してひた走る、その心持

ちと、その姿勢の尊さを教えられたのであります。

言い換えれば、大聖人様の本因の仏法とはスタートラインに立ち、スタートターによるピストルの合図と共に、第一歩を踏み出そうとしたその瞬間に、私たちの成仏は保障されたことになるのであります。

もつと云えば、当日を迎えるまでには、練習を積み重ねなければなりません。その準備段階をも重要視するのが本因であると思ひます。

このことからすれば老若男女、貴賤道俗の差別なくスタートラインに立ち、それぞれの立場においてたゆむことなく精一杯走り出そうと、全力を出し切ったところが、ゴールとなるのであります。即ち、それぞれのゴールが即身成仏となるのが大聖人様の本因妙の教えであります。

しかし、だからといって自分勝手にゴールを決めてはいけません。「南無妙法蓮華経は精進行なり」(『御義口伝』全集七九〇頁)とありますので、たゆまず努力し、どこまでも純信に精進し続けることが大切であります。

以上の本因の教えから、身延に向け出発されましたが、その後、どこで引き返したのかは分かりませんが、結果的には、ゴールである大聖人様の元には行けず、お会いすることは残念ながら叶わなかったのであります。

ですが、国府入道殿のお心はすでに佐渡を出発した時から大聖人様の元へと届いている、と考えるのが本因の考え方であり、また更に云えば、国府入道殿が最初に身延へ行かれた建治元年の『国府尼御前御書』には、

「ごぜんの御すがたをばみまいらせ候はねども、心をばこれにとこそをばへ候へ」(建治元年六月十六日、全集一三二五頁)

と、是日尼御前のお姿は直接は拝見できないけれども、お心はすでに身延へ、日蓮の目の前に、確かに来られていると実感していますよと。とあります。

想像致しますに、是日尼が大聖人様に対し、「直ぐにでも大聖人様の元にお参りしたい、お逢いしたい」との渴仰恋慕の思いを込めたお手紙と共に、御供養の品々を国府入道殿へ託された事へのご返事であろうと思ひますが、正に大聖人様の元へ直接お参りされなくとも、渴仰恋慕の志によつて、お心は既に大聖人様の元に届くのであります。

皆様方の寺院参詣も同じであります。毎月の事ですから、お経日や御講には前々から予定を立ててお参りできるように準備をし、その日を迎えたとすれば、急な用事が出来てしまい、参詣が叶わなかったとしても、心はすでにお寺にお参りしていると思ひます。

しかしその様な時でも、何を差し置いても優先的にお寺に行く信心は必要かと思ひます。

たとえ病床に伏していたとしても、法要に合わせて心の中でお題目が唱えられれば、心は常にお寺にあると思ひます。

以前、法性寺にいた時の話ですが、横手でも山間部の山内という所に住んでいた、もう亡くなったおばあさんは、冬は雪が深く中々お参りが出来ない事もあり、春のお彼岸にお参りされた時には、毎年、お正月と書いた御供養と一緒に御本尊様にお

供えられていました。

まさしく、これが本因の修行であろうと思います。お正月には雪が深くお参りできないので、「お正月」と書いた御供養を自宅の仏壇にお供えしておいて、雪どけをまつて、やっと参詣

お給仕に励み続けた結果、ついにその檀王は成仏得道を遂げる事ができたのであります。この檀王とは積尊の事であり、阿志仙人とは提婆達多であったと、提婆達多品に説かれるお話であります。

が叶う様になってから、当日の御供養と一緒に持参された、そのお婆さんの心持ちは大切であり、純真なる信心姿勢であったと思います。

《檀王と阿私仙人・

千歳給仕と私達の信心修行》

拝読の御書に、

「又今年来てな(菜)つみ、水くみ、たきぎこり、だん(檀)王の阿志仙人につかへしがごとくして」

とあります。

ここに出てきます阿志仙人と檀王の物語は、法華経の提婆達多品第十二に説かれる千歳給仕のお話であります。

檀王という王様が、その王位を捨て



寺尊世の跡邸殿入道国府

拝読の御書には、
「だん(檀)王の阿志仙人につかへしがごとくして一月に及びぬる不思議さよふで(筆)をもちてつくしがたし。」とあります。

て、仏法を求めて修行をしていた時に、妙法蓮華経の教えを体得していた阿私という仙人に出会い、そして千年もの間、八種

この阿志仙人に使えた檀王の千歳給仕を私たちの信心に置き換えた時には、御本尊様へのお給仕になると思います。

のお給仕、具体的には、山に行つて菓を採り、沢に降りては水を汲み、また森に入つて薪を拾い、火をおこし、食事を調べ、さらには仙人の身の周りを清潔に掃除するなど、休むことなく、

寺院参詣の折に、雑草を一本でも抜くことや、落ち葉を一つ拾う事などであったとしても、ご本尊様に対するお給仕になります。ご家庭にあつても、ご自宅の御本尊様へのお給仕は、信心をする

者にとつては欠かせない信心修行の基本でもあります。またその心構えは、報恩感謝の真心を込めたお給仕が肝要であります。大聖人様は日常の信仰の振る舞いを、『一生成仏抄』の中で次のように仰せになっております。

「仏の名（みな）を唱へ、経巻をよみ、華をちらし、香をひねるまでも、皆我が一念に納めたる功德善根なりと信心を取るべきなり。」（全集三八三頁）

と仰せであります。

つまりお仏壇を綺麗に掃除し、新しいお櫛や、お水やお仏飯をお供えし、勤行の時には蠟燭を灯し、香を焚いてお給仕申し上げ、法華経を誦誦し、南無妙法蓮華経とお題目を唱える、ご本尊様へのお給仕の化儀作法のすべては、一念心に功德善根を積む尊い行いであると仰せであります。

もともと功德とは、「積功累徳」^{しやくくうらいとく}を略した語で、「功を積み、徳を累ねる」ことであります。

また心を込めて、お給仕申し上げる所作の全ては、とりもなおさず自分自身の仏性を磨いていることになるのであります。

拝読の御書の最後には、

「これひとへに又尼ぎみの御功德なるべし。又御本尊一ふく（幅）かきてまいらせ候。」

とあります。

大聖人様は、国府入道殿を送り出し、約三ヶ月ものあいだの留守を守られた是日尼の信心を思いやられ、ご主人が身延の山奥までこられたのも、是日尼の支えがあつたからであると、そしてその功德は、ひとえに是日尼の功德となるであろうと、大

聖人様は、御本尊一幅を授与され、是日尼の信心を愛でられ、称えられております。更に、

「靈山浄土にてはかならずゆきあひたてまつるべし」

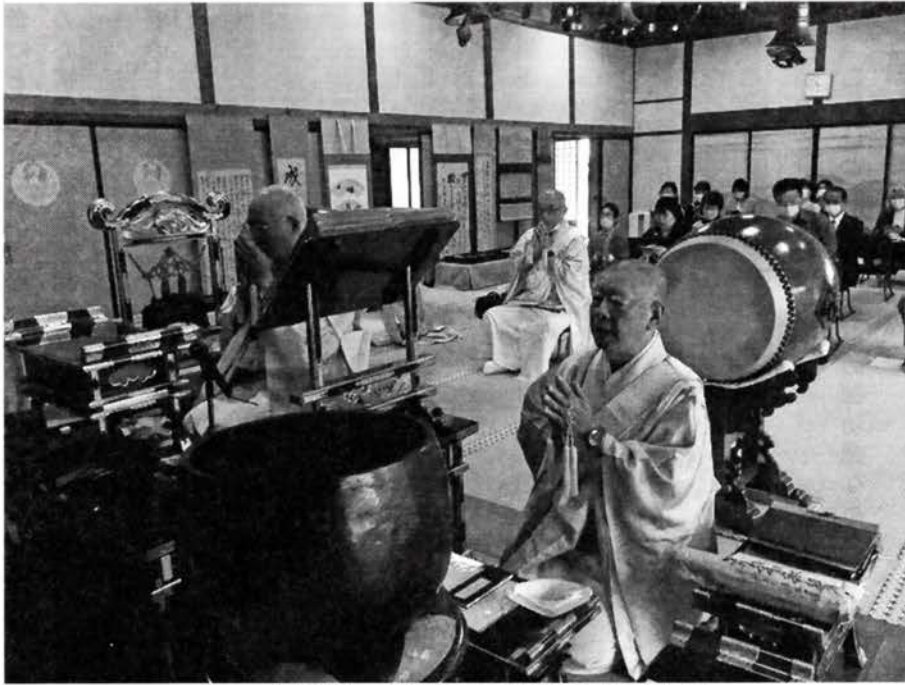
と、是日尼ともども、「必ず靈山浄土でお会い致しましょうよ」とのお言葉は、御本尊様の授与に加え、是日尼にとりましては、大聖人のお心遣いがどれほどか有難く、更なる信心修行の励みとなつたであろうことは、計り知れないものと思います。また、南条時光殿に与えられたお手紙などにも、同様に誠に有難いお言葉を仰せであります。

私たちも、是日尼同様に御本尊様を信じ、大聖人様の教えを信じ、その教えどおりに純信に南無妙法蓮華経と唱え信心修行に励んでいけば、この上なく有難い事に、靈山浄土にて大聖人様のお迎えを受ける事が出来るのであります。

本日は、いろいろと多岐にわたつた法話となりましたが、大聖人様から有難きお言葉を頂戴した是日尼や、当時の檀越方の信心をお手本・鏡とし、大聖人様から同じように励ましやお讃めの言葉を頂戴できるよう、本日ご参集の皆さま方には、源立寺ご住職・菅野憲道ご尊師の信心指導をしっかりと身に体され、常に仏祖三宝尊への報恩感謝の念を忘れずに、自行化他に亘るご信心に、なお一層のご精進くださいます様お願い申し上げます。

最後に、源立寺様のご興隆と法華講のご発展、並びにご参集の皆様方のご健勝を祈念致しまして、私の講演とさせて戴きます。

ご清聴誠に有難うございました。



恵日だより

立宗会・お虫払い

四月二十八日(金) 午前十時

朝から晴れ渡り、絶好のお虫払い日和となったこの日、午前十時から、立宗会・お虫払い法要が、源立寺本堂において奉修されました。

宗祖の立教開宗に思いをはせ読経・唱題(立宗会)

法要は、ご住職の導師により読経・唱題と如法に行われた後、ご住職から、宗祖日蓮大聖人のご誕生から、出家・得度、諸宗遊学等を経て、建長五年に立宗宣言にいつたことについて、その経緯や意義等につきお話がありました。

引き続き、お虫払いのお経があげられて、重宝の御

本尊等が奉掲され、お風通しされました。

また、本堂内には、法華経類、大聖人が常にお側に置かれ、行間・紙背にさまざまな注記を施された「私集最要文注法華経」の精巧な複製巻軸のほか、中山法華経寺聖教殿所蔵の多数の大聖人御真筆御書を完全復刻した貴重な巻軸や冊子など、貴重な資料が数多く並べられました。今回は、特に法華経関連各種資料三十一



展示の法華経の名品について解説されるご住職(お虫払い)

点が展示されて、目録資料に基づいて詳しい内容、歴史状況、法華経が如何に重用されていたかについて、ご住職より解説をいただきながら拝観しました。

案内 お知らせ

* 一日研修会は延期します

六月二十五日(日)に予定していましたが、諸般の事情により延期いたしますので、ご了承ください。

【お知らせ】

『恵日』の月号は、第五十一回源立寺法華講総会特集として編集しましたが、紙面の都合上、
北摂地区 橋本良介さん
同 中川美奈子さん
のお二人の所感発表は、次号に掲載いたします。
あしからずご了承願います。

【水無月詠草】

三十年も 昔習ひし 英会話

〔和風〕

思ひ出せずに 「キム」の手を取る

愛犬の お産まぢかと 思へたり

大き乳房に 初乳の光る

【恵日俳壇】

〔農婦〕

半身は泥の中にて蓮を剪る

近寄れぬ田にも畑にも梅雨出水

〔森 秀之〕

山の木にからまり上る藤の花

藤棚を真上から見てもよし

藤棚を眺めた空に鯉泳ぐ

〔故吉田 裕〕

黄砂降る町にメガネを買替えて

鬱溜めて雛の夜を漂へり



六月の行事

- 一日(木) 午後二時 お経日
- 四日(日) 午前九時 講中勤行会・幹事会
- 十一日(日) 午後一時 お講・役員会
- 十三日(火) 午後一時 お講
- ※二十五日(日) に予定していた一日研修会は、延期します。

※七月号の継命・恵日発送(6月末)は、「兵庫」地区が担当です。
八月号の継命・恵日発送(7月末)は、「槻木」地区が担当です。

◆コロナの五類移行について

五月八日より、新型コロナウイルス感染症の分類が五類に移行しました。
これに伴いマスクの着用等が、個人の判断に任せられることになりましたので、源立寺の各種法要・行事においても講員各位の判断にお任せすることといたします。
講員各位におかれましては、よろしくお願いたします。

源立寺

恵日
令和五年六月号 通巻三四一号
令和五年六月一日発行
編集兼 菅野憲道
発行人 菅野憲道
発行 恵日編集室
〒563-0057 池田市槻木町一〇 源立寺内
TEL (077) 751-3335
E-Mail kanno@wombat.zaq.ne.jp
購読料(含送料) 年間二〇〇〇円
〒振替 加入者名 恵日編集室会計
口座番号 0138012112649